

生き難さを感じながらも、その生き難さの正体も、自分とは何者なのかさえ
わかりにくい状況に私たちはいます。

この生き難さに向かい合うあり方は様々ですが、私たちは映像表現でこの生き難さに穴を穿っていきたいのです。
日本にも世界にも同じ思いを持ち、夢中になって映像をつくっている人々があります。私たちはささやかながら、
生きたいように生きんとして映画をつくっている人々、そのような映画を観に足を運んで下さる方々が出会える場にしたいと、
この映画祭を開催しています。観ることは、出会うこと、世界や自分が変わることであり得ると私たちは感じています。
皆さんのご来場をお待ちしています。

25日 (金)	15:45 フリースクール部門 国内外のフリースクールの 子ども・若者による映像作品上映 & 制作者のトークセッション この日のみ参加費500円 (前売りなし。会場に直接お申し込み下さい)	17:10 10回記念特別上映 ・コップの中の子牛 ・Bullets in the Hood ・Death of A Gay Teenager 【トークゲスト】砂川秀希(文化人類学者)	19:00 10回記念特別上映 ・班女(映像版) ・ベアテ・シロタ・ゴードン ・星が流れてる ★「班女」豊理俊監督トークセッション	
	26日 (土)	14:00 一般公募作品 ・ごっこ ・SOUTH FOREST ★「SOUTH FOREST」眞壁香監督 「ごっこ」大泉恒平監督トークセッション	15:50 原一男監督推薦作品 たゆたいながら ★阿部周一監督トークセッション	17:45 一般公募作品 10回記念特別上映 ・FREISTUNDE 一日中何もしない ・From Tsukuba ★「From Tsukuba」森元誠監督 トークセッション
	27日 (日)	12:00 演劇×映像スペシャルセッション 班女 (劇団山の手事情社&シュール大学映像プロジェクト) ★大久保美智子さん(俳優・山の手事情社) トークセッション	14:00 原一男監督講演 「生きたいように生きる」と 今日の映像表現	15:30 一般公募作品 ・ごっこ ・SOUTHFOREST ・From Tsukuba 10回記念ディスカッション 台詞演習に交流/パーティー(参加費別)

参加費

	一回券	フリーパス
早割	1000円	3000円
当日	1200円	3500円

※フリーパスチケットは全ての回をご覧いただけます。ご希望日の前日までに申し込み
いただくと、当日参加よりお安くご覧になれます。

早割のお申し込み方法

1. E-mail または FAXにてお申し込みください
2. 確認メールをお送りします
3. 郵便振替にてご入金ください
4. 入金確認後、チケットをお送りします

E-mail: univ@shure.or.jp FAX: 03-5155-9802

件名を「映画祭予約」とし[お名前][チケットの種類と枚数][郵便番号][住所]を本文に明記の上、
送信してください。

振込先 郵便振替 加入者名: 東京シュール 口座番号: 00160-0-765397

お問い合わせ先: シュール大学 Tel: 03-5155-9801 E-mail: univ@shure.or.jp
*作品および上映時間を変更する場合があります。ご予約・ご来場の前にHPでご確認ください。
上映スケジュールや最新情報はこちら⇒ shureuniv.org/filmfes/

助成: GAP財団

会場 シュール大学特設シアター

【アクセス】
都営大江戸線 若松河田駅
若松口から徒歩5分

【住所】東京都新宿区若松町28-27

■シュール大学
1999年にフリースクール東京シュールを母体に若
者とスタッフで設立した。知る・表現するということ
を自分のスタイルで進めることで、自分とは何者かを
問い、自分の生き方を創り出すということを標榜す
る場となっている。現在、学生約30人、スタッフ4人
に、原一男を始め、平田オリザ、巖井慎、上野千鶴
子ら様々な分野のアドバイザーが約50人いる。

生きたいように 生きる 第10回シュール大学 国際映画祭

会場: シュール大学特設シアター 主催: NPO法人東京シュール シュール大学国際映画祭実行委員会

2017.8.25 FRI - 27 SUN

10回記念特別プログラム
原一男監督講演会
原監督推薦作品「たゆたいながら」
演劇×映像「班女」劇団山の手事情社&シュール大学映像プロジェクト
公募作品・海外作品などの上映

The detailed information is available.
Visit <http://shureuniv.org/filmfes/>

SHURE UNIVERSITY INTERNATIONAL FILM FESTIVAL

「生きたいように生きる」と今日の映像表現

8月27日(日)14時



ドキュメンタリー映画の巨匠原一男監督は危機感を持っている。現代社会に生きる人々に、現在映像を学ぶ学生や、若手作家たちにも危機感を持っている。映像表現の第一線で40年以上にわたり活躍してこられた原監督が抱く危機感とはどのようなものなのか、今回の上映作品も含め、「生きたいように生きる」というこの映画祭のテーマと現在の映像表現について大いに言葉を語って頂く。

原一男 (はら・かずお) ...映画監督。45年生まれ。72年、疾走プロダクションを設立し、『さようならCP』を監督・撮影。その後の作品に、『ゆきゆきて、神軍』『機私的エロス・恋歌1974』『全身小説家』などがある。2006年から大阪芸術大学映像学科教授。

演劇×映像スペシャルセッション

班女

演劇：劇団山の手事情社
映像監督：豊理登 (シュレ大学映像プロジェクト)
8月27日(日)12時 ※映像のみ上映：8月25日(金)19時



三島由紀夫は日本文化に造詣が深かったことは周知のことであるかもしれないが、存外、歌舞伎や能の本を習っていたことは知られていない。班女は世阿弥の同名の能を本歌取りしてそのモチーフを活かしながら三島由紀夫ならではの世界を紡ぎだしている作品だ。その現代能を現代演劇で様式・型を取り入れて演じようというのが今回の大久保美智子を中心とした山の手事情社の演劇である。「様式をめぐる冒険」はその創作過程を描いたドキュメンタリー映像だ。三島の能の伝統舞台の基盤である能楽師に教えを請いながら、現代劇として班女を演じるまでのダイナミックな過程を映像化している。今日の映画と演劇は別々の表現をプツプツと並べるのではなく、ひとつながりの表現として上演することの一つの企図である。

たゆたいながら

8月26日(土)15時50分



原発事故後、福島市は放射能に汚染されるも、避難区域に指定されることはなかった。不安を覚えながらもどまり続ける人、迷いながらも地元を離れ、避難した人。選択・葛藤・そして分断。

監督：阿部周一 2017年/75分/日本

一般公募作品



ごっこ 監督：大泉信平 2019年/33分/日本

「人形ごっこするぞ」真のくせに人形遊びをするほど仲良かった大泉家三兄弟。しかし、長男の不登校を機に兄弟の会話はなくなってしまった。大学の卒業制作という機会を得て長男・慶太にカメラを向けさせた。「もう一度、仲の良かった関係性を取り戻したい」そんな気持を込めて、次第に二人の関係性は悪化していく。人形の代わりにカメラを持って、20年越しのごっこ遊びが始まった。



SOUTH FOREST 監督：眞壁香 2017年/8分/日本

戦争中のガザ難民窟、閉じ込められたまま国際する無力な命に刺さる少女。そこへ突如、空爆が降る。



From Tsukuba 監督：森元謙 2017年/9分/日本

主人公はつくばに住み、筑波大学に通っている大学生である。繰り返す変化のない日々。この繰り返しの先に、彼はつくばからどこへ行くのか、どこへ行くことができるのか、どこへ行きたいのか、疑問は抱いている。彼は苦悩の先に何をみるのだろうか。いや、苦悩の先には何も無い。

この映画祭は今回で10回の節目を迎えた。映像表現を軸に生きていこうという人、映像作品を観るのが好きな人、そんな人たちが「生きたいように生きる」という趣旨の映像表現を鑑み、1年に一度集まる映画祭にしたいと2008年に鬼才原一男監督をアドバイザーにこの映画祭は始まった。出会う映画祭にしたい、ということから、上映後のトークセッション、会館のあるカフェ、誰もが参加できるパーティーなども続けてきた。第10回記念の今回、原一男監督の講演とそれに続くオープンディスカッションを最終日に迎えたい。

10回記念ディスカッション

映像表現で生きたいように生きるにはどうすればいいのか

「生きたいように生きる」という言葉は実質もないかもしれないが、実際にそのように生きることは難しく、また切実な問題だ。この映画祭を始める時に、私たちは生きたいように生きるということ、映像表現で突き抜けるということ、同好の士とこの映画祭を基盤に実現しようとした。しかし、私達がそのような映像表現をすることは難しいだけでなく、高懸していた作品も、多くの映画祭や上映会などで見る作品からも多くの映像表現者にとって難しさがあふれる。それは、私達が生きているからということと関わらせたくない。所詮無理、と聞き流すこともない。どうしたら風穴を穿つことができるのか、今回の上映作品の監督と実行委員の両名のオープンディスカッションを本映画祭10回の節目に盛り込みたいと思います。

8月27日(日)15時30分



コップの中の子牛

監督：魚藤直 2014年/11分/日本

父が4才の娘ヌスに牛乳コップに牛がいるという嘘をついた。それを信じて娘が牛乳を飲み干したが、牛はいなかった。父が常にいろんな嘘をつき、娘が段々父のことを信頼しなくなってきた。



Bullets in the Hood

監督：テレンス・フィッシャー 2004年/22分/アメリカ

ブルックリンで育ったテレンスは、7人の友人を銃で失った経験から、銃社会の問題をテーマにドキュメンタリーを制作し始めた。その中で目の前で友人が警官に撃たれてしまう。ダウンタウンコミュニティテレビの若者向けプログラムから生まれた渾身の一作。サンダンス映画祭・審査員特別賞受賞。



Death of A Gay Teenager

監督：Kang Sangwoo 2009年/23分/韓国

ロケットと内に秘めながら、しかし誰かあるこの思い。私はこの思いが報われないことを知りながら、彼を見つめ、彼のことを考えてしまう。そして「私」の思いが静かに押し殺されていく様を描く。クールだが、見るものにヒリヒリとした痛みを感じさせる作品。



星が流れてる

監督：山本康孝子 2007年/5分/日本

当映画祭の前身に「国際映像イベント」開催地のある社会で生きていくというテーマがある。このイベントは当時シュレ大学の映像アドバイザーだった羽仁未央氏と共に企画段階から作り上げ、開催された。この作品は当時シュレ大学生だった山本が、イベントを共に作った。羽仁未央氏やシュレ大生、各国の友人へ送る手紙のような作品である。



ペアテ・シロタ・ゴードン

監督：豊理登 2011年/30分/日本語

女性として唯一、GHQの日本国憲法草案制作に関わったゴードン氏のドキュメンタリー。彼女は幼いころ両親と共に日本に来て、当時の女性の置かれている状況を目の当たりにした。女性と子どもの権利を守ることはおのずと早業につながる——そのような思いから、新憲法草案の日本国憲法に女性や子どもの人権の必要性を訴え続けた。



FREISTUNDE 一日中何もしない

監督：マルガレーテ・ベンフェ 2015年/66分/ドイツ

この映画は幼い息子を持つ映画監督が既存の学校に満足せず、息子を連れてたい理想の学校を探し求める旅だ。監督が訪れたのはリースクールだ。子どもが何をどんな風に学ぶのかを決め、学校のあり方までも子どもたちで作り出すところに魅力を感じた。監督はドイツ、イギリス、イスラエルなど、世界の関係者を訪ね、90人もの人にインタビューしたドキュメンタリー映画だ。

8月25日(金)17時10分 トークゲスト：砂川秀樹さん(文化人類学者・シュレ大学アドバイザー)

文化人類学者としての活躍だけでなく、性的少数者のアクティビストとして東京のプライドパレードを軌道に乗せ、日本で初めてピンクドットを沖縄で成功させるなど活躍してきた。この映画祭では不登校というマイノリティ性だけでなく、性的少数者の表現も多く寄せられてきた。そのようないきさつからご登壇頂く。

世界と日本のフリースクールの映像の世界

フリースクール、オルタナティブスクール、デモクラティックスクール、様々な名前が日本にも世界にもある。今日上映する3本はイスラエルを代表するヘデラ・デモクラティックスクール、今、注目を集める不登校特例校の東京シュレ基幹中学校、滋賀のブラジル人学校である日本ラチーノ学院OGの作品だ。どの場でも自分の好きなことを好きなだけ取り組むことが出来るのだということと映像が通じている。ヘデラの作品は特にスタイルがあることを感じさせる。基幹シュレの作品はスタッフも巻き込んで楽しんでいる様子が伝わってくる。ラチーノ学院の作品は映像をつくることの喜びに溢れている。



Nikei Banzōjin 監督：藤井アツタ 2016年/7分/日本

フリースクール部門